

「録音の笑い」の影響と公的自意識との関係

— 退屈なコメディ映像を用いた検討 —

鷗子修司¹⁾ 高井次郎²⁾

何かを笑い愉しむこと、すなわちユーモアの享受は、人類に普遍的な娯楽であろう (Martin, 2007 野村・雨宮・丸野訳 2011)。これはユーモアが多く時代の文化内で確認され (see Attardo, 2014)、普遍的な表出としての「笑い」が存在しており (Provine & Yong, 1991)、その神経相関項 (Panksepp & Biven, 2012) や進化における起源 (Gervais & Wilson, 2005) も特定できることなど、収束的証拠から論証可能である。

だがユーモアの享受という現象は普遍的だとしても、人々が何に対してユーモアを経験するのかには、時代・文化による差異のみならず、大きな個人差すら存在する (Billig, 2005 鈴木訳 2011)。今日までユーモア研究者は、ユーモアの生起に関わる普遍的メカニズムの探求と共に、こうした差異の発生に関わる変数についても調べてきた。例えば、個人の性別や気質・性格などの変数と、特定の形式や内容により構成されたジョークや漫画への嗜好との関係については、既に多くの研究が存在している (e.g., Ruch & Hehl, 2007; Ruch, & Köhler, 2007)。

これらの研究からは、ユーモアの享受に関する多くの興味深い知見が得られてきた。ただし、こうした知見は基本的に、社会的な文脈から独立した、個人内の過程や変数に関するものに限られている。だが一方で、近年のユーモア研究の多くが、ユーモアの本質が社会性にあることを主張している (e.g., Billig, 2005 鈴木訳 2011; Martin, 2007 野村他訳 2011)。その根拠として例えば、人がユーモアを経験する対象には、常に何某かの主体が関わっており (Bergson, 1900 竹内訳, 2011; Hurley, Dennett, Adams, 2011 片岡訳 2015)、その経験されたユーモアは、独りであるときより他者と共にいるとき、笑いとして表出されやすい (Provine & Fischer, 1989)。また笑いの起源は、サルや霊長類が遊びの文脈において示す表情である (Gervais & Wilson, 2005; van Hoof &

Preuschoft, 2003) などの知見が挙げられる。

こうした主張が妥当ならば、ユーモアの享受に関する実証的研究の対象が、個人内の過程・変数に偏っている現状は、ユーモアの全貌を明らかにする上で不足がある。従って、今後のユーモア研究には、社会的文脈におけるユーモアの享受に焦点を当てた研究の累積が必要である。本研究では、上述した将来に必要な研究の端緒として、同じ対象を鑑賞する他者の笑い声という社会的要因が、個人の享受するユーモアに及ぼす影響を検討する。

ユーモアとユーモラスネスの定義

ここで個人の享受するユーモアは、少なくとも2つの側面に分けられる (Berger, 1997 森下訳 1999)。第一に、個人の内部に生じる反応としての側面である。このとき、ユーモアは個人に生じる感情の一種として定義できる (雨宮, 2016; Hurley et al., 2011 片岡訳 2015; 伊藤, 2007, 2010; Martin, 2007 野村他訳 2011)。すなわち、この場合でのユーモアとは、個人の主観的経験の報告や、その経験と相関する笑い表出 (Strack, Martin, & Stepper, 1988)、自律神経系における闘争/逃走 (fight or flight) 反応 (Foster, Webster, & Williamson, 2002; Lackner et al., 2013)、及び報酬系の活性 (Mobbs, Greicius, Abdel-Azim, Menon, & Reiss, 2003; Mobbs, Hagan, Azim, Menon, & Reiss, 2005) などに示される、一過性の反応である。

第二に、外部の対象 (e.g., ジョーク, 漫画) が備える性質としての側面である (Berger, 1997 森下訳 1999)。すなわち、人に感情としてのユーモアを生じる対象は、共通する抽象的性質を備えているように見える。そして、近年のユーモアに関する理論では、この性質を何らかの不調和 (incongruity) として定義するのが一般的である (e.g., Hurley et al., 2011 片岡訳 2015; Warren, & McGraw, 2016)。この不調和の詳細な定義については、未だ論争の最中だが (see Martin, 2007 野村他訳 2011)、各定義に基づく実証研究の知見や、日本語や英語を始め、多くの言語で奇妙さ (≒ 不調和) を表す言葉が、同時にユーモラスさを表す (e.g., おかしい, funny: Hurley et

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生
(指導教員: 高井次郎教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

al., 2011 片岡訳 2015) という事実から、不調和理論の妥当性は支持される。

ただし、ここで重要な点は、感情としてのユーモアが、性質としてのユーモア (i.e., 不調和) を表象する (cf. Prinz, 2004 源河訳 2016) としても、両者は独立した存在である。つまり、感情としてのユーモアが生じても、性質としてのユーモアが存在しない場合 (i.e., 誤表象) は起こり得るし、その逆も然りと考えられる。実際に、感情としてのユーモアの指標 (i.e., 笑顔表出の強度) と、性質としてのユーモアの指標 (i.e., 滑稽さの評価) とは、通常は強い相関関係にある (Ruch, 1995)。だが後述する「録音の笑い」の存在や、刺激の反復鑑賞 (Gavanski, 1986) などの文脈では、この相関が失われることがある。例えば、同一の漫画を反復して鑑賞するとき、鑑賞者の笑顔表出は次第に弱まる。その一方で、漫画の滑稽さに関する鑑賞者の評価は変化しない現象が生じるのである。

以上により、感情としてのユーモアと、性質としてのユーモアは、多くの場合で同時に存在するが、原理的に独立した側面であると結論付けられる。故に本研究では、混乱を避けるために、両者を異なる概念として定義する。すなわち、感情としての側面のみを「ユーモア」として定義し、性質としての側面は「ユーモラスネス」として新たに定義する。その上で、本研究はユーモアの享受と、ユーモラスネスの享受の、何れについても検証する。

「録音の笑い」挿入の影響に関する研究

他者の笑い声が、個人のユーモア・ユーモラスネスの享受に及ぼす影響は、「録音の笑い (canned laughter)」という笑い声の効果音を用いることで、古くから研究が為されてきた。この研究の基本的方法は、実験参加者にジョーク音声や漫画を呈示する際に、「録音の笑い」を伴う場合 (実験条件) と、伴わない場合 (統制条件) で、実験参加者の笑い表出の強度 (i.e., ユーモアの指標) や、刺激について滑稽 (funny) であると評価する程度 (i.e., ユーモラスネスの指標) を比較するというものである。

こうした実験の結果、刺激への「録音の笑い」挿入は、個人が享受するユーモア・ユーモラスネスを増すことが知られている。Fuller & Sheehy-Skeffington (1974) や Platow et al. (2006) 実験では、ジョーク音声に「録音の笑い」を挿入すると、実験参加者の笑い表出の強度と、滑稽さの評価が何れも向上した。刺激にコメディ音声を用いた Martin & Gray (1996) の研究でも同様であった。ただし「録音の笑い」による影響は、必ずしもユーモア・ユーモラスネスの両方に生じるわけではない。例えば、Chapman (1973) の実験では、ジョーク音声に「録音の笑い」を挿入すると、実験参加者の笑い表出

は強まるも、滑稽さの評価は変化しなかった。一方で、Porterfield et al. (1988) の実験では、NG 音声 (bloopers) に「録音の笑い」を挿入すると、実験参加者の笑い表出は変化せず、滑稽さの評価のみ向上した。刺激としてジョーク音声を用いた Lawson, Downing, & Cetola. (1998) の研究でも同様であった。

以上の知見が示唆するのは、「録音の笑い」が個人のユーモア・ユーモラスネスの享受へと及ぼす影響には、複数の独立した過程が存在する可能性である。

「録音の笑い」の影響過程

「録音の笑い」が、個人が享受するユーモアに影響を及ぼす過程については、笑い声による感情の伝染として説明が可能である。つまり、他者の笑い声を聴くことは、それだけで個人にユーモアを生起するのだと考えられる。これを支持する知見として、Provine (1992) の実験では、ジョークやコメディなどに挿入せずとも、単に笑い声を聴くだけで、実験参加者は笑いを表出した。また近年の機能的磁気共鳴画像法による研究でも、他者の笑い声を聴くと、ユーモアに関する実験参加者の脳領域に賦活が生じた (Meyer, Zysset, Cramon, & Alter, 2005; Sander, Brechmann, & Scheich, 2003; Sander & Scheich, 2001)。

この仮説は、同時に「録音の笑い」が個人の享受するユーモラスネスに影響を及ぼす過程について、部分的な説明を可能にする。何故なら、個人に生じるユーモアが、基本的には対象のユーモラスネスを表象しているならば、ユーモラスネスを評価するとき、個人は自身の享受するユーモアを参照すると考えられるためである (cf. Schwarz & Clore, 1983)。すなわち、「録音の笑い」から生じたユーモアは、挿入された対象のユーモラスネスの評価に帰属されるのである。しかし、この仮説だけでは、何らかの要因の影響により、個人の享受するユーモアに「録音の笑い」挿入が影響していない (i.e., 笑い表出の強度が変化しない) 場合も、ユーモラスネスの享受には影響が生じる場合については説明できない。それ故に、ユーモラスネスについては、さらに独立した影響過程の存在を検討する必要がある。

この過程の一つとして考えられるのが、笑い声の持つ修辭的機能 (Billig, 2005 鈴木訳 2011) の影響である。すなわち他者の笑い声は、その人物にユーモアが生じたことを示すと同時に、その人物によるユーモラスネスの評価を他者に伝えるための修辭技法でもある。そして、一部の不調和理論によれば、ユーモラスネスは社会的に不適切な主体の言動や思想に関する概念と考えられる (Warren, & McGraw, 2016)。そのため人間社会の多くは、社会における適切な言動や思想を共有・教育する手段に

笑いを用いている (Bergson, 1900 竹内訳, 2011; Billig, 2005 鈴木訳 2011; Ziv, 1984 高下訳, 1995)。それ故に、ユーモラスネスの評価において、個人は他者の笑い声を参照し、それに同調する傾向を備えていると考えられる。

この仮説を支持するように、Lawson et al. (1998) の実験において、実験参加者の享受するユーモラスネスに「録音の笑い」が影響したのは、実験参加者が「録音の笑い」を本心の笑いだと判断できる場合に限られていた。さらに Platow et al. (2006) の実験でも、実験参加者の享受するユーモア・ユーモラスネスに「録音の笑い」が影響したのは、それが内集団 (i.e., 同大学の学生) だと教示されていた場合に限られていた。これらの知見は、「録音の笑い」による影響の一部は、その内容を個人が認知的に吟味した上で生じていることを示している。

ただし、これらの研究では「録音の笑い」の認知的な影響過程について、その影響の個人差を検討していない。しかし、実際は「録音の笑い」が伝える内容を認知的に吟味した上で、その内容に同調するか否かには、個人の特性に応じた差異が存在すると予想される。

本研究の目的

以上より本研究は、「録音の笑い」が個人の享受するユーモア・ユーモラスネスに及ぼす影響に関する知見が、本邦でも再現されるか否かの追試を、第一の目的とする。その上で、第二の目的として、特にユーモラスネスへの認知的な影響と、個人の特性との交互作用を検討する。

このとき本研究では、個人の特性として公的自意識 (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975) について検討する。特性としての公的自意識は、容姿や言動など、他者から観察可能な「社会的な対象としての自己に注意を向ける傾向」として定義される (Buss, 1980)。押見 (2002) は、公的自意識の高い人物の傾向の一つに、社会的な受容の渴望を挙げており、それ故に公的自意識の高い人物ほど、他律的な追従の反応を示すと主張する。これを支持する知見として、個人の公的自意識と同調傾向の相関関係は、多くの研究で実証されている (e.g., Froming & Carver, 1981; 黒沢, 1993; 吉武, 1989)。従って「録音の笑い」についても、公的自意識の高い人物ほど影響されやすいと予想することができる。

方法

要因計画 「録音の笑い」の挿入2 (有・無) × 公的自意識2 (高・低) の混合2要因計画。「録音の笑い」の挿入が被験者内、公的自意識が被験者間要因である。

実験参加者 愛知県の公立大学生81名 (男性10名、女性71名、 $M_{age} = 19.77$, $SD = 1.14$) が実験に参加した。

実験刺激 最初に2種類のコメディ映像 (約90秒) を、筆者と実験を実施した大学の学生、計6名 (男性1名、女性5名) の合議から選び、これらを映像A・Bとした。次いで、映像A・Bそれぞれについて、「録音の笑い」を挿入したCL (canned laughter) 映像と、挿入しないNCL (no canned laughter) 映像の2種類を作成した。こうして作成された計4つの映像を、それぞれCLA, NCLA, CLB, NCLB映像として実験に用いた。

このとき「録音の笑い」は、映像の開始から25秒時点、50秒時点、75秒時点、計3箇所付近における登場人物の言動直後に挿入した。またCL映像においては映像前に「この映像中に聞こえてくる笑い声は、〇〇大学 (実験を実施した大学名) の学生たちが、以前この映像を観たときの笑い声です」という教示文を画面上に表示した。

なおCL映像に挿入した「録音の笑い」には、実験を実施した大学の学生4名 (男性2名、女性2名) による「日常生活で、TVや映画のコメディなどを観て、心から笑っているときのような笑い声」を個別に録音した上で、編集・合成した笑い声 (約3秒) を使用した。こうした笑い声の収集にあたり、各協力者にはインターネットで収集した笑いを誘う画像を複数提供し、協力者の任意のタイミングで上述した笑い声を発するように依頼した。最後に、作成されたCL映像における「録音の笑い」がわざとらしく聞こえないことも、実験を実施する大学の女子学生6名を対象にした予行実験により確認した。

また映像A・Bは、映画『人生狂騒曲』(Monty Python's The Meaning Of Life: 1983年公開) の日本語吹替え版から作成した。『人生狂騒曲』は数々のスケッチの連続で構成されているが、その内の少数は映画全体のテーマを知らないと、内容を理解することが困難だと考えられる。そして『人生狂騒曲』は、約30年前に英国で制作された作品であり、かつ日本国内では未だ劇場公開・TV放送がされていない作品である。従って、実験参加者の多くは、作品の内容や評判について知識を持たないと予想された。加えて、そもそも現代・日本の大学生には、古い・海外の映画である『人生狂騒曲』は退屈であるとも予想された。以上の根拠から、本作品から作成した実験刺激であれば、「録音の笑い」と無関係に、そもそも個人のユーモア・ユーモラスネスの享受を規定する要因を統制することが可能であると判断した。

質問紙の構成 本実験では、主に映像鑑賞中の経験や、映像に対する評価を訊ねる第一質問紙と、映像鑑賞中や第一質問紙への回答に際し、「録音の笑い」へ意識的に同調したか否かを訊ねる第二質問紙の2種類を使用した。

第一質問紙では (a) ユーモラスネスの享受を訊ねる尺度として、Labott, Martin, Eason & Berkey (1991) の

映像評価尺度より「愉快」因子を邦訳した5項目と (e.g., 映像はどれくらい満足できるものでしたか), 「一般的な大学生にとっての映像の滑稽さ」項目を, 1点 (全く〜でない) から11点 (非常に〜である) までの11件法で訊ねた。また質問の工夫により, ユーモアの享受のみを評価できる可能性 (Gavanski, 1986) についても考慮し, ユーモアの享受については, (b) 映像鑑賞中に経験した「おかしくて笑ってしまうときのような楽しい気持ち」についての項目と, 現在も経験している感情についての, 一時的気分尺度 (徳田, 2007) の「活気」因子3項目 (e.g., 陽気な気分だ) を11件法で訊ねた。さらに (c) 笑いの尺度として, Labott et al. (1991) に基づいて作成した, 笑い発声の自己評定項目と, 独自に作成した笑顔表出の自己評定項目を, 前者は1点 (全く笑わなかった) から7点 (大きな声で笑った) までの7件法, 後者は笑顔の平均画像 (菅原他, 2007) を選択肢とする5件法により訊ねた。(実験参加者と同じ性別の画像を提示した)。

第二質問紙では, 同様の (a) ユーモラスネス享受尺度, (b) 笑い尺度における笑い発声の自己評定項目について, CL映像に「録音の笑い」が挿入されていなかった場合を想像して, 改めて回答するように求めた。これに加えて, (c) ユーモラスネスの享受における同調反応の自覚尺度, (d) 笑いにおける同調反応の自覚尺度として, CL映像の「録音の笑い」を聞き, 「他の人が笑っているのだから, この映像は滑稽なのだ」と, 或いは「もっと大きな声で笑おう」と意識した程度を1点 (全く意識しなかった) から7点 (非常に意識した) までの7件法により訊ねた。また操作確認のため (e) 「録音の笑い」をわざとらしく感じた程度 (7件法), 及び (f) 作品の視聴経験の有無についても訊ねた。

手続 実験参加者は, 実験に参加を表明した時点で, 菅原 (1984) の作成した日本語版の自意識尺度より, 「公的自意識」因子11項目 (e.g., 人の目に映る自分の姿に心を配る) に, 1点 (全く当てはまらない) から7点 (非常に当てはまる) までの7件法により回答した。

実験参加者は個別に実験室へ入室し, PCモニター正面約1mに置かれた椅子に着席した。それから実験者より実験全体の流れについての説明を受けた。

その後, 実験参加者はCLA・NCLA映像の何れかと, CLB・NCLB映像の何れか, 計2つの映像を鑑賞した。このとき実験参加者は1つの映像が終わるごとに, その映像について第一質問紙への回答を求められた (計2回)。このとき映像の提示順にはカウンタ・バランスを取った。すなわち, 映像の提示順序はCLA・NCLB, NCLA・CLB, CLB・NCLA, NCLB・CLAの何れかが, 実験参加者ごと無作為に割り振られた。また実験参加者が映像を鑑賞中,

実験者は隣室にて待機した。

2つの映像を鑑賞, 及び各映像について第一質問紙に回答した後で, 実験参加者は第二質問紙へと回答した。ここで実験参加者は実験者より, 第二質問紙の質問とCL映像についての第一質問紙の回答が対応していると教示され, 第二質問紙では第一質問紙での自身の回答を参照しつつ答えるよう求められた。なお第二質問紙への回答に際し, 実験参加者が映像を誤って想起することを防ぐため, 実験参加者にはCL映像の教示文と, 「録音の笑い」が挿入された3場面のサムネイル画像を提示した。

第二質問紙に回答後, 実験参加者は実験目的について, 改めて説明を受け, 実験参加を終えた。以上の手続きに要する時間は約15分であった。

結果

第2質問紙において「録音の笑い」について「だいぶわざとらしく感じた」, 「非常にわざとらしく感じた」と答えた実験参加者のデータを, 後の分析からは除外した。このとき除外された実験参加者は18名であり, 残りの63名 (男性7名, 女性56名, $M_{age} = 19.76$, $SD = 1.16$) のデータが分析に使用された。

最初に「公的自意識」因子11項目の合計得点を算出, その平均値によって実験参加者を二分し, それぞれ公的自意識の高群・低群とした。その結果, 有効データの内, 30名が低群に33名が高群となった。

各尺度得点の平均値とSD, 及び信頼性の確認

公的自意識尺度は「公的自意識」因子11項目を合計し尺度得点とした。この尺度の信頼性は $\alpha = .90$ と, 十分な内的整合性を持つと確認された。

ユーモラスネス享受尺度より, 「愉快」因子5項目を合計して「愉快」下位尺度得点とした。尺度の信頼性は $\alpha = .93$ と, 十分な内的整合性を持つと確認された。

ユーモア享受尺度より, 「活気」因子3項目を合計し「活気」下位尺度得点とした。尺度の信頼性は $\alpha = .91$ と, 十分な内的整合性を持つことが確認された。

ユーモアの享受について

映像鑑賞中に享受したユーモアの項目, 及び「活気」下位尺度について, 「録音の笑い」挿入と「公的自意識」を独立変数とした分散分析を行った。その結果, 何れも「録音の笑い」挿入の主効果が有意であり ($F(1, 61) = 5.11, p < .05$; $F(1, 61) = 6.96, p < .05$), その一方で「公的自意識」の主効果は有意でなかった ($F(1, 61) = 0.13, n.s.$; $F(1, 61) = 0.32, n.s.$)。さらに「録音の笑い」挿入と「公的自意識」との交互作用も有意でなかった ($F(1, 61) = 0.70, n.s.$; $F(1, 61) = 0.06, n.s.$)。

同様に、笑い発声・笑顔表出の自己評定尺度について、「録音の笑い」挿入と「公的自意識」を独立変数とした分散分析を行った。その結果、何れも「録音の笑い」挿入の主効果が有意であり ($F(1, 61) = 8.15, p < 0.01$; $F(1, 61) = 8.55, p < 0.01$)、その一方で「公的自意識」の主効果は有意でなかった ($F(1, 61) = 0.97, n.s.$; $F(1, 61) = 1.95, n.s.$)。さらに「録音の笑い」挿入と「公的自意識」との交互作用も有意でなかった ($F(1, 61) = 0.02, n.s.$; $F(1, 61) = 0.24, n.s.$)。

ユーモラスネスの享受について

映像の滑稽さ項目、及び「愉快」下位尺度について、「録音の笑い」挿入と「公的自意識」を独立変数とした分散分析を行った。その結果、何れも「録音の笑い」挿入の主効果が有意であり ($F(1, 61) = 17.82, p < 0.01$; $F(1, 61) = 18.95, p < 0.01$)、一方で「公的自意識」の主効果は有意でなかった ($F(1, 61) = 1.06, n.s.$; $F(1, 61) = 0.04, n.s.$)。さらに「録音の笑い」挿入と「公的自意識」との交互作用も有意でなかった ($F(1, 61) = 0.85, n.s.$; $F(1, 61) = 0.62, n.s.$)。

同調反応の自覚について

ユーモラスネスの享受、及び笑いにおける同調反応の自覚尺度については、「公的自意識」を独立変数とする分散分析を行った。その結果、何れの尺度についても、「公

的自意識」の主効果は有意でなかった ($F(1, 61) = 0.02, n.s.$; $F(1, 61) = 2.09, n.s.$)。

以上の分散分析の結果を、Table 1にまとめて示す。

考察

本研究では、他者の笑い声という社会的な要因が、個人の享受するユーモア・ユーモラスネスに及ぼす影響について、「録音の笑い」を用いた実験により検証した。

実験の結果は、「録音の笑い」の影響に関する、海外の先行研究の結果を再現した。すなわち、「録音の笑い」は実験参加者のユーモア・ユーモラスネス享受を増進した。しかし、この影響と実験参加者の「公的自意識」特性の交互作用に関する、本研究の仮説は支持されなかった。すなわち、実験参加者の公的自意識の傾向の高・低は、「録音の笑い」による影響の大きさを規定しておらず、さらに実験参加者は「録音の笑い」による影響について、同調反応として自覚してもしなかった。

先行研究と比較して、本研究で新たに得られた知見は、退屈な刺激に「録音の笑い」を挿入した場合も、個人のユーモア・ユーモラスネス享受が増すという知見である。これに対して、基本的に先行研究の知見は、そもそもがユーモラスな刺激へと「録音の笑い」を挿入した場合に

Table 1 Results of ANOVA for each independent variables

Group	Measure	Without CL	With CL	CL	PuSC	CL × PuSC
		<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>F</i>	<i>F</i>	<i>F</i>
Low PuSC (n=33)	Humor	5.67 (2.19)	6.27 (2.34)	5.11 *	0.13	0.70
	Vigor	14.36 (5.99)	16.39 (6.15)	6.96 *	0.32	0.06
	Laughter	1.82 (0.98)	2.12 (1.14)	8.15 **	0.97	0.02
	Smiling	2.18 (0.92)	2.70 (1.49)	8.55 **	1.95	0.24
	Funniness	6.00 (2.50)	7.09 (1.94)	17.82 **	1.06	0.85
	Amusement	29.00 (10.37)	35.30 (6.29)	18.95 **	0.04	0.62
	Awareness of Conformity: Humorousness	4.82 (1.36)			0.02	
Awareness of Conformity: Laughter	2.73 (1.66)			2.09		
High PuSC (n=30)	Humor	5.77 (2.49)	6.53 (2.36)			
	Vigor	15.30 (6.34)	17.00 (5.78)			
	Laughter	1.57 (1.07)	1.90 (1.00)			
	Smiling	1.93 (0.98)	2.30 (0.84)			
	Funniness	5.20 (2.40)	6.90 (2.40)			
	Amusement	29.57 (10.58)	33.93 (8.72)			
	Awareness of Conformity: Humorousness	4.87 (1.20)				
Awareness of Conformity: Laughter	3.37 (1.85)					

Note. CL = canned laughter; PuSC = public self-consciousness.

* $p < .05$, ** $p < .01$

限られていた。従って本研究は、より広い刺激における「録音の笑い」の影響を明らかにしたものと考えられる。

「録音の笑い」の認知的な影響過程について

本研究の仮説が支持されなかった理由として、以下のような説明が考えられる。まず本研究の実験において、「録音の笑い」は実験参加者の享受するユーモアにのみ直接的に影響しており、ユーモラスネス享受への影響は、このユーモア享受を参照することで間接的に生じている可能性がある。すなわち、ユーモラスネス享受に対する直接的な影響が存在しないため、そもそも「公的自意識」との交互作用が生じ得なかったのだと考えられる。

なお「録音の笑い」が、実験参加者のユーモラスネス享受に対して直接的に影響しなかった理由についても、二つの説明が考えられる。第一に、「録音の笑い」により実験参加者の享受するユーモアが増した結果、これを参照するユーモラスネスの享受 (i.e., 滑稽さの評価) と、「録音の笑い」から伝わる他者のユーモラスネス評価が、同程度で重なった可能性がある。つまり、個人と他者の評価とで差異が無かった故に、個人は他者からの影響を受けなかったのだと考えられる。

第二に本実験の文脈では、実験参加者が本来享受するユーモラスネスの程度と、「録音の笑い」の伝える評価が明らかに異なるために、「録音の笑い」による直接的な影響が生じなかった可能性がある。Wimer & Beins (2008) の実験では、実験参加者がジョークの滑稽さを評価する際に、事前に他者による評価を教示することは、個人のユーモラスネス享受に影響を及ぼした。すなわち、個人は教示された評価の方向へと、自身の評価を向上／低下させた。しかし、このとき他者の評価が極端に高い／低い場合には、この影響は生じなかった。この知見を本研究に当てはめると、退屈なコメディ映像に挿入された「録音の笑い」もまた、実験参加者と大きく異なる他者の評価を伝えていたため、その影響が生じなかったのだと考えられる。

本研究の仮説が支持されなかった別の理由としては、「録音の笑い」の認知的な影響過程が、笑いが伝達する具体的な評価とは無関係という可能性もある。すなわち認知的な影響は、「録音の笑い」が刺激のユーモラスな箇所に向けられる際の手がかりとして機能することで生じるのであり (Fuller & Sheehy-Skeffington, 1974)、笑い声が伝達する評価への同調により生じてはいないと考えることもできる。ただし、この説明は笑いの修辭的機能に関する、日常的な事例と整合しないように見える。

Moerman (1988) によれば、人々はタイミングや数、声量、速度の多様な笑いを使い分けて、複雑な意味をも伝えている。例えば、多くの・大きな笑いを織り交ぜて

会話を始める人物は、その会話がジョークであることを伝えている。対してジョークを聞いた人物が、少ない・小さな、または遅れた笑いを返したならば、ジョークがつまらなかったことを伝えている。或いは、その人物が笑わず (unlaugh: Billig, 2005 鈴木訳 2011) を返せば、ジョークへの強い拒絶を伝えているという具合である。

そして、日常的に多様な笑いを使い分け、またそれを特に意識することなく解釈できる人々が、「録音の笑い」が伝える評価を無視する場合、それは偶然以上の理由から生じる反応と考えられる。すなわち、「録音の笑い」は、単なる手がかり以上の機能を持つのである。

本研究の限界

本研究の限界には、以下の2つが挙げられる。第一に、ユーモア・ユーモラスネスの享受の指標として、何れも自己評定尺度を用いたことである。特にユーモア享受の指標である笑いも自己評定尺度で測定しているために、その結果にはユーモア・ユーモラスネスの享受の両方が混在している可能性を排除できないことは問題である。これを避けるには、実験参加者の笑いを外部から観測し、その笑いを Facial Action Coding System (Ekman, Friesen, & Hager, 2002) などの技法を用いて評定するといった方法が考えられる。

なお実験参加者の笑いを外部から観測しなかったのは、カメラやワンウェイ・ミラーなどが存在することにより、実験参加者の笑いが抑制されたり (Martin, Sadler, Barrett, & Beaven, 2008)、実験参加者の公的自意識が影響を受けたりする (Buss, 1980) のを防ぐためである。これらの問題は、カメラの存在を実験参加者に伝えず、映像分析については事後的に承諾を得るなどの方法でも回避できるが、本研究では倫理的配慮のため断念した。だが今後の研究では、倫理的問題には十分に配慮しつつ、こうした方法の利用も検討すべきと考えられる。

本研究の限界として、第二に検討された刺激の種類が少ないことがある。本研究で刺激として用いたコメディ映像は何れも、Ruch & Hehl (2007) の分類における、ナンセンス (i.e., 不調和を解決する「オチ」を伴わない) な形式により構成された刺激に該当すると考えられる。従って、本研究の知見は、別の形式や内容から構成された刺激には当てはまらない可能性がある。これを検証する方法には、まず本研究の結果を先行研究の結果と、特に刺激の種類による影響に関して比較することが考えられる。しかし先行研究では、基本的に実験刺激の特徴について詳細に言及しておらず、この検証方法は事実上、実践が困難であると考えられる。従って「録音の笑い」による影響を、刺激の種類ごとに検証することは、今後の重要な研究課題だと考えられる。

ここまで指摘した問題は、「録音の笑い」を用いた実験研究にのみ当てはまるものである。しかし、他者の笑い声という社会的要因が、個人の享受するユーモア・ユーモラスネスに及ぼす影響の検討という、さらに広い文脈においては、実験研究のみに依存した検討自体に、何れ限界が生じると考えられる。故に今後の研究では、現実の社会生活の観察により得られる証拠も重要になる。録音機器の高性能化・小型化が進んだ現在では、自然な会話場面の観察・分析により、現実の社会生活における笑いの機能を検証する研究も増加している傾向にある (e.g., Jefferson, 1984, 1985; Moerman, 1988)。従って、これらの研究から得られた知見と、実験研究で得られた知見が将来的に統合されることで、笑いという現象の全貌が解明可能になると考えられる。

引用文献

- 雨宮俊彦 (2016). 笑いとユーモアの心理学 一何が可笑しいの?— ミネルヴァ書房
- Attardo, S. (Ed.). (2014). *Encyclopedia of humor studies*. USA: Sage.
- Berger, P. L. (1997). *Redeeming laughter: The comic dimension of human experience*. Berlin & New York: Walter de Gruyter.
(バーガー, P. L. 森下伸也 (1999). 癒しとしての笑い ピーター・バーガーのユーモア論 新曜社)
- Bergson, H. (1900). *Le rire, essai sur la signification du comique*.
(ベルグソン, H. 竹内信夫 (訳) (2011). 笑い—喜劇的なものが指し示すものについての試論 白水社)
- Billig, M. (2005). *Laughter and ridicule: Towards a social critique of humor*. London: Sage.
(ビリッグ, M. 鈴木聡志 (訳) (2011). 笑いと嘲り—ユーモアのダークサイド 新曜社)
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Chapman, A. J. (1973). Funniness of jokes, canned laughter and recall performance. *Sociometry*, **36**, 569-578.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & Hager, J. C. (2002). *Facial Action Coding System*. Salt Lake City, UT: Research Nexus.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522.
- Foster, P. S., Webster, D. G., & Williamson, J. (2002). The psychophysiological differentiation of actual, imagined, and recollected mirth. *Imagination, Cognition and Personality*, **22**, 163-180.
- Froming, W. J., & Carver, C. S. (1981). Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, **15**, 159-171.
- Fuller, R. G. C., & Sheehy-Skeffington, A. (1974). Effects of group laughter on responses to humorous material: A replication and extension. *Psychological Reports*, **35**, 531-534.
- Gavanski, I. (1986). Differential sensitivity of humor ratings and mirth responses to cognitive and affective components of the humor response. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 209-214.
- Gervais, M., & Wilson, D. S. (2005). The evolution and functions of laughter and humor: A synthetic approach. *The Quarterly Review of Biology*, **80**, 395-430.
- Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B., Jr. (2011). *Inside jokes: Using humor to reserve-engineer the mind*. USA: MIT Press.
(ハーレー, M. M., デネット, D. C., & アダムズ, R. B., Jr. 片岡宏仁 (訳) (2015). ヒトはなぜ笑うのか—ユーモアが存在する理由 勁草書房)
- 伊藤大幸 (2007). ユーモア経験に至る認知的・情動的過程に関する検討: 不適合理論における2つのモデルの統合へ向けて 認知科学, **14**, 118-132.
(Ito, H.)
- 伊藤大幸 (2010). ユーモアの生起過程における論理的不適合および構造的不適合の役割 認知科学, **17**, 297-312.
(Ito, H.)
- Jefferson, G. (1984). On the organization of laughter in talk about troubles. In J.M. Atkinson and J.C. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp.346-369). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Jefferson, G. (1985). An exercise in the transcription and analysis of laughter. In T. Van Dijk (Ed.), *Handbook of discourse analysis, Vol. 3: Discourse and dialogue* (pp.25-34). London, UK: Academic Press.
- 黒沢香 (1993). 多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響 心理学研究, **63**, 379-387.

- (Kurosawa, K. (1993). The effects of self-consciousness and self-esteem on conformity to a majority. *Japanese Journal of Psychology*, *63*, 379-387.)
- Labott, S. M., Martin, R. B., Eason, P. S., & Berkey, E. Y. (1991). Social reactions to the expression of emotion. *Cognition & Emotion*, *5*, 397-417.
- Lackner, H. K., Weiss, E. M., Schuller, G., Hinghofer-Szalkay, H., Samson, A. C., & Papousek, I. (2013). I got it! Transient cardiovascular response to the perception of humor. *Biological Psychology*, *93*, 33-40.
- Lawson, T. J., Downing, B., & Cetola, H. (1998). An attributional explanation for the effect of audience laughter on perceived funniness. *Basic and Applied Social Psychology*, *20*, 243-249.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor: An integrative approach*. London: Elsevier Academic Press.
(マーティン, R. A. 野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一 (訳) (2011). ユーモア心理学ハンドブック 北大路書房)
- Martin, G. N., & Gray, C. D. (1996). The effects of audience laughter on men's and women's responses to humor. *The Journal of Social Psychology*, *136*, 221-231.
- Martin, G. N., Sadler, S. J., Barrett, C. E., & Beaven, A. (2008). Measuring responses to humor: How the testing context affects individuals' reaction to comedy. *Humor: International Journal of Humor Research*, *21*, 143-155.
- Meyer, M., Zysset, S., Cramon, D. Y. von, & Alter, K. (2005). Distinct fMRI responses to laughter, speech, and sounds along the human peri-sylvian cortex. *Cognitive Brain Research*, *24*, 291-306.
- Mobbs, D., Greicius, M. D., Abdel-Aziz, E., Menon, V., & Reiss, A. L. (2003). Humor modulates the mesolimbic reward centers. *Neuron*, *40*, 1041-1048.
- Mobbs, D., Hagan, C. C., Azim, E., Menon, V., & Reiss, A. L. (2005). Personality predicts activity in reward and emotional regions associated with humor. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, *102*, 16502-16506.
- Moerman, M. (1988). *Talking culture: Ethnography and conversation analysis*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- 押見輝男 (2002). 公的自意識が作り笑いに及ぼす効果 心理学研究, *73*, 251-257.
- (Oshimi, T. (2002). The effect of public self-consciousness on forced laughter. *Japanese Journal of Psychology*, *73*, 251-257)
- Panksepp, J., & Biven, L. (2012). *The archaeology of mind: Neuroevolutionary origins of human emotions*. New York: W. W. Norton & Company.
- Platow, M. J., Haslam, S. A., Both, A., Chew, I., Cuddon, M., Goharpey, N., Maurer, J., Rosini, S., Tsekouras, A., & Grace, D. M. (2005). "It's not funny if they're laughing": Self-categorization, social influence, and responses to canned laughter. *Journal of Experimental Social Psychology*, *41*, 542-550.
- Porterfield, A. L., Mayer, F. S., Dougherty, K. G., Kredich, K. E., Kronberg, M. M., & Okazaki, Y. (1988). Private self-consciousness, canned laughter, and responses to humorous stimuli. *Journal of Research in Personality*, *22*, 409-423.
- Prinz, J. J. (2004). *Gut reactions: A perceptual theory of emotion*. Oxford University Press.
(プリンツ, J. 源河亨 (訳) (2016). はらわたが煮えくりかえる 情動の身体知覚説 勁草書房)
- Provine, R. R. (1992). Contagious laughter: Laughter is a sufficient stimulus for laughs and smiles. *Bulletin of the Psychonomic Society*, *30*, 1-4.
- Provine, R. R., & Fischer, K. R. (1989). Laughing, smiling, and talking: Relation to sleeping and social context in humans. *Ethology*, *83*, 295-305.
- Provine, R. R., & Yong, Y. L. (1991). Laughter: A stereotyped human vocalization. *Ethology*, *89*, 115-124.
- Ruch, W. (1995). Will the real relationship between facial expression and affective experience please stand up: The case of exhilaration. *Cognition & Emotion*, *9*, 33-58.
- Ruch, W., & Hehl, F. -J. (2007). A two-mode model of humor appreciation: Its relation to aesthetic appreciation and simply-complexity of personality. In W. Ruch (Ed.), *The sense of humor: Explorations of a personality characteristic* (pp. 109-142). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Ruch, W., & Köhler, G. (2007). A temperament approach to humor. In W. Ruch (Ed.), *The sense of humor: Explorations of a personality characteristic* (pp. 203-230). Berlin & New York: Mouton de Gruyter
- Sander, K., Brechmann, A., & Scheich, H. (2003). Audition of laughing and crying leads to right amygdala

- activation in a low-noise fMRI setting. *Brain Research Protocols*, *11*, 81-91.
- Sander, K., & Scheich, H. (2001). Auditory perception of laughing and crying activates human amygdala regardless of attentional state. *Cognitive Brain Research*, *12*, 181-198.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. (1983). Mood, misattribution, and judgments of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, *45*, 513.
- 菅原 健介 (1984). 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. *心理学研究*, *55*, 184-188.
- (Sugawara, K. (1984). An attempt to construct the self-consciousness scale for Japanese. *Japanese Journal of Psychology*, *55*, 184-188.)
- 菅原徹・笠井直子・佐渡山亜兵・上條正義・細谷聡・井口竹喜 (2007). 笑顔の多様性と印象の関係性分析 感性工学研究論文集, *7*, 401-407.
- (Sugahara, T., Kasai, N., Sadoyama, T., Kamijo, M., Hosoya, S., & Iguchi, T. (2007). Analysis of the relationship between a diversity of smiles and facial impressions. *Journal of Japan Society of Kansei Engineering*, *7*, 401-407)
- Strack, F., Martin, L. L., & Stepper, S. (1988). Inhibiting and facilitating conditions of the human smile: a nonobtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, *54*, 768.
- 徳田完二. (2007). 筋弛緩法における気分変化 立命館人間科学研究, *13*, 1-7.
- van Hooff, J. A., & Preuschoft, S. (2003). Laughter and smiling: The intertwining of nature and culture. In F. B. M. de Waal & P. L. Tyack (Eds.), *Animal social complexity: Intelligence, culture, and individualized societies* (pp. 260-287). Cambridge, MA: Harvard University Press
- Warren, C., & McGraw, A. P. (2016). Differentiating what is humorous from what is not. *Journal of Personality and Social Psychology*, *110*, 407.
- Wimer, D. J., & Beins, B. C. (2008). Expectations and perceived humor. *Humor: International Journal of Humor Research*, *21*, 347-363.
- 吉武久美子 (1989). 集団形成パターンと公的自己意識の高低が個人の判断に及ぼす影響 実験社会心理学研究, *29*, 65-69
- (Yoshitake, K. (1989). The effects of the consensus forming patterns and public self-consciousness in members' judgements. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, *29*, 65-69.)
- Ziv, A (1984). *Personality and sense of humor*. New York: Springer.
- (ジップ, A 高下保幸 (訳) (1995). ユーモアの心理学 大修館書店)

(2017年10月25日受稿)

ABSTRACT

Relationship between effect of canned laughter and public self-consciousness:
An experiment using non-humorous comedy video clips

Shuji UKO and Jiro TAKAI

Adding pre-recorded, or “canned” laughter often encourages the viewer’s humor appreciation of the humorous materials such as a joke and comedy, and this effect can be explained partly as a form of conformity toward other laughing viewers. In this study, we replicated the effect of canned laughter on the viewer’s affective and cognitive humor appreciation, and this is the first research about the effect of canned laughter in Japan. We hypothesized that only those with high public self-consciousness (PuSC) are influenced cognitively, but not necessarily affectively by canned laughter. In a laboratory experiment, 81 undergraduates watched a non-humorous comedy video clips presented either with/without canned laughter, and then rated how humorous it was, along with how much they felt it to be humorous. Both high and low PuSC participants evaluated the comedy with canned laughter as being more humorous, and derived more humor than without canned laughter. Both groups also actually did laugh along with canned laughter. These results suggest that the effect of canned laughter as a form of conformity do not emerge under the given conditions.

Key words: humor, humorousness, canned laughter, public self-consciousness